

マックス・E・アマンの 世界馬術界展望

マックス・E・アマン氏は政治ジャーナリストから馬術界に転身し、障害飛越のワールドカップを創始しオーガナイズするなど馬術界に多大な貢献をしてきた人物だ。そのアマン氏が、世界の馬術界の過去から現在までの話題を縦横に語る。

競技場でともに競い合う 親子や兄弟姉妹、夫と妻

馬

術がほかのスポーツと違う点を見つかる。何よりも道具ではなく生きていくパートナーとしての馬がいる。男女がともに覇を競い合い、競技場ではエレガンスと華麗さ正確性が力とスピードと相まって引きこまれるようなパフォーマンスを見ることのできる。さらに、面白いことに国際的なトップレベルの競技会で夫婦や兄弟姉妹、親子、時には祖父祖母が選手として競い合う姿を見ることができるといって探ってみよう。

こうした国際レベルでの選手の親族関係は世界のどこでも見られる。たとえば日本では3代のオリンピック選手を輩出している例を挙げられる。祖父、川口宏一選手（56年出場）、父、杉谷昌保選手（68年、72年出場）、杉谷泰造選手（96年、00年、04年、08年、12年出場）だ。アルゼンチンにはマルゴルガ夫妻、サガスタ兄弟、モリヌエヴォ親子、ピスタリニ親子などがある。そしてオーストラリアにはロイクロフト家がある。父のビル、その3人の息子、さらに妻の息子と5人のオリンピック選手を出している一家だ。

スイスには5世



トイタウンに騎乗したアン王女の娘、ザラ・フィリップ。ロンドン五輪の総合の代表に選ばれた。©Kit Houghton/FEI

代にわたる馬術一家がいる。祖母は20年代のもっとも優れた女性ライダーのひとりレネ・シユワルツエンバッハ、父ハンスは59年に総合馬術のヨーロッパチャンピオン、息子アルフレッドは72年の総合馬術のオリンピック代表で、その娘ミッシェルは現在、国際的な総合馬術の選手だ。しかしその上をいく代々続くもっとも優れた馬術一家は英王室のウインザー家だ。エディンバラ公爵は4頭立て馬車競技の選手として80年に団体で世界チャンピオンに輝き、娘のアン王女は総合馬術の個人で71年のヨーロッパチャンピオンとなり、さらにその娘、ザラ・フィリップは05年のヨーロッパチャンピオン、06年の世界チャンピオンに輝いている。66年の馬場馬術世界チャンピオン、ジョセフ・ネッカーマン（ドイツ）はその生涯の多



上:ウイテカー家の面々。左端がマイケル、右隣がジョン。
下:ふたりの甥、ジョージも頭角を現している。
©Tony Parkes/FEI Dirk Caremans/FEI

くをトップライダーとして活躍した。その娘、エヴァ・マリリア・ブラシエはカナダの代表として88年のソウルオリンピックで団体の銅メダルを獲得し、さらにその娘、マルティナもオリンピックに出場している。

こうした中でもっとも興味深いのがウイテカー家だ。ジョンとマイケルの兄弟は誰もが知る有名な人。兩人とも30年以上にわたりイギリス障害チームの永続的なメンバーだ。ジョンの子どもはロバート、ルイズは国際的なライダーとして認められている。ジョンとマイケル以外の兄弟は馬に関心がなかったが、その子どもたちが伯父を継いでいる。ステイブの娘、エレンは07年のヨーロッパ選手権のイギリスチームの一員であり、イアンの息子のウイリアムも障害飛越で国際的な競技会に出場している。

2世代の活躍

これまで数世代にわたる馬術一

家を紹介したが、2世代で2人以上の国際的なライダーを輩出している家族を紹介しよう。ジョン・ウオフォードは障害飛越チームのアメリカ代表の一員として32年のロスアンジェルス五輪に出場し、3人の息子のうち2人、ジェブとジムが総合馬術のオリンピックメダリストに、そして3番目の息子、ウオーレンも障害飛越の選手として活躍し、その妻に50年代の障害飛越におけるもっとも優れた女性ライダーのひとり、ダウン・パレスoupを迎えた。

アイルランドのコノリー・カレウス家ではパトリックが総合のオリンピックライダーであり、彼の妹、ダイアナは障害のオリンピッククワイダーである。そしてパトリックの娘、ヴァージニア・マックグラスもオリンピックに出場した。現代のもっとも著名な父子はブラジルのペソアだ。父、ネルソンはヨーロッパでの多くのダービーとグランプリの優勝経験を持ち、息子、ロドリゴは世界選手権



2009年、ウェリントンで開催されたワールドカップに優勝したロドリゴ・ベソア&ルーファス号。
©Ken Braddick/FEI

とオリンピックに優勝し、ワールドカップに3度優勝している。フランスにはデュ・プリユール、セントルフト・パイラード、ロジェル、ビゴといった数組の優れた父子がいる。イギリスでは、ハーヴェイ・スミスはロバート、ステイブというふたりの息子を持っている。スイスにはフェール家とブーラー家に父子のオリンピックライダーがいる。父ヴェルナー・フェールは24年、息子ヨルグは36年にオリンピックに出場した。父ハンス・E・ブーラーも24年、息子アントンは48、60、72年と3度オリンピックに出場した。そして現在は障害のステイブ・ゲルダの活躍が目覚ましい。彼は84年、88年のオリンピックライダーであり現在、ベルギーチームのコーチを務める、フィリップの息子だ。

スウェーデンには2組の父子がいる。1912年の第1回世界馬術選手権のストックホルム大会に出場し、同じ名を持つ息子が50年

代にオリンピックに優勝したのが父、ハンス・フォン・ブリクセン・フィンネクとグスタフ・アドルフ・ボルテンスターンだ。また、父娘では馬場のモニカ・テオドレスコと父、ジョルジュが挙げられる。娘はドイツ代表だった。総合のイングリッド・クリムケはもともと優れたドレツァージュライダーの誉れ高い、ライナー・クリムケを父に持つ。

母息子の唯一の例はスイスのドレツァージュライダー、母ドリス、息子ダニエルのラムゼイアー親子だ。母娘に転じれば、オーストリアのエリザベス・トイラーと娘ヴィクトリア、オランダのティネケ、イムケ・バーテルズ母娘、ドイツのリゼロット、アン・キヤサリン・リンゼンホフ母娘は皆馬場で活躍している。

兄弟姉妹ライダー

兄弟姉妹のライダーを見てみると男兄弟がもともと国際的に活躍し、兄妹、姉弟の関係では数が減り、国際レベルの姉妹ライダーとなるとほとんど目にするのは少ない。

もともと傑出した兄弟ライダーはイタリアのドウインゼオ、ドイツのシヨッケメーレ、スイスのフ

ックス、歴史を振り返れば、スウェーデンのレーヴェンハウプト、フィンランドのエルンロスなどだ。

現在89歳と87歳のピエロ&レイモンド・ドウインゼオの国際的なキャリアは第二次世界大戦終戦直後から始まった。76年から48年の間にふたりは8回のオリンピックに出場し、それぞれ6つのメダルを得た。シヨッケメーレ兄弟はそれぞれのピークの時期がずれている。アルウィンが初めてオリンピックで金メダルを獲得したのは60年での時は団体の一員で、76年に個人として金メダルを手にした。ポールの傑出した記録はヨーロッパ選手権で81年、83年、85年と3回連続で優勝したことだ。スイスのフックス家はマークス、トーマスの兄弟と、ハイジとアンドレアの姉妹が活躍した。マークスは01年のワールドカップで優勝し、トーマスはいくつかのメジャー競技会で優勝した。

由緒ある家柄のレーヴェンハウ



右から2番目がステイブ・ゲルダ。©Christophe Bicot/FEI

プト家は4人のオリンピックライダーを輩出した。チャールズ、カールグスタフ兄弟は12年に、もうひとりのカールグスタフは20年に、48年にはグレゴールがオリンピックに出場した。グレゴールは56年のオリンピックで障害飛越のコースをデザインした。このコースは馬術界初の近代的なコースで議論の的となった。

男女の兄弟でもともと華々しい活躍をしたのはイギリスのジェーン&クリストファー・バーテルとともに84年のオリンピックに出場した。デイヴィッド・ブルームと妹のリズ・エドガーは優れた障害の選手だ。ブレナ家の3兄弟の活躍も注目値する。マイケル、ジェニー(現在はロリスティーン・クラーク)とジェーンは3人ともオリンピックに出場した。

前述の通り、姉妹で活躍している選手は珍しい。すでに紹介したイギリスのジェニーとジェーン・ブレン姉妹に加え、ドイツ人の馬場馬術選手、ジーナとナーディン・カペルマン姉妹、スウェーデンの総合馬術でリンダとサラ・アルゴットソン姉妹などがある。

カップルのライダー

スイス、オーストラリア、イギリスには夫婦の優れた選手が多い。スイスの総合馬術選手、ポール・ウェアーとモニカ・バックマン夫妻はともにオリンピックに数回出場している。56年に総合でオリンピックに出場したサミュエル・コーチリンは56年にオリンピックに出場したスイスの総合選

手、パット・スミスと結婚した。彼女はイギリス代表として競技に参加しており、50年代にはヨーロッパ選手権に優勝した経験を持つ。1924年にオリンピックに出場したオリンピックライダー、チャリー・ストフェルは20年代に活躍した女性ライダーの、アネリース・シユスターと結婚し、ふたりの息子、アレクサンダーも52年と56年の2度オリンピックを経験している。総合馬術ではウェイ、ヴィッキー・ロイクロフト夫妻、アンデイ・ホイ、ベッティナ・オヴァーレシユ夫妻、デイヴィッド・グリーン、ルシнда・プリオア、プラマー夫妻、デイヴィッド、カレン・オコナー夫妻、そして現在も活躍しているクレイトン、ルシнда・フレドリックス夫妻がいる。

カップルの最後に1972年に団体の一員としてオリンピックチャンピオンとなったマーク・フィリップを挙げよう。彼の最初の妻はアン王女で、現在は84年に馬場馬術のアメリカ代表となったサンデイ・フルーガーの夫である。

マックス・E・アマン

1938年、スイス生まれ。1964年に渡米しニューヨークの国連本部詰め外国人特派員として主に政治関係のジャーナリストとして活躍。69年に『スイス・アメリカン・レビュー』紙の編集長に就任。73年にスイスに帰国し、『ルツェルン新聞』に編集長として迎えられる。そのかわり、馬術競技観戦が趣味だったことから馬術関連の記事も手掛け、翌74年に国際馬術ジャーナリスト連盟(IAEJ)の会長に就任。78年新聞社を退社、以降、馬術のさまざまな大会でディレクターを務めるなど、多大な貢献をしてきた。